

「旧約の信仰者たちの手本」 ヨシャパテ (11:32~34)

これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオンとバラク、サムソンとエフタ、また、ダビデとサムエルと預言者たちについても話すならば、時がたりないでしょう。彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行い、約束のものを得、獅子の口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。

■はじめに

1. 手紙の背景と 11 章の内容

(1) この手紙が書かれた時期は、紀元 64 年から 66 年頃。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。

(2) 迫害の中で必要とされるのは、信仰による忍耐。この手紙の 11 章は、信仰による忍耐をテーマにしつつ、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという内容である。

2. 11 章 32~34 節は、試練の中で信仰による勇気を発揮した先輩たちを挙げている。時期としては、士師の時代からイスラエル王国の時代である。

(1) 「ギデオンとバラク」、「サムソンとエフタ」は、王国建国前、部族間のゆるやかな連合体であった時代にイスラエル民族を指導したリーダーたち（士師・さばきつかさ）である。

(2) 「サムエル」は、士師の時代から王国の時代に移行する過渡期を担った人物である。最後の士師である。また、少年ダビデに油を注いで、神がダビデを王に任命したことを示した預言者である。

(3) 「預言者たち」は原文では、「サムエルと預言者たち」とあり、サムエルの後に続いた王国時代以降の預言者たちを指している。

(4) 「ダビデ」は、王たちの代表として挙げられている。ダビデの人生は、まさに「信仰によって、国々を征服し、・・・」という 33 節と 34 節、そのものの歩みであった。33 節と 34 節の、信仰によって成された 9 つの項目のうち、ダビデに該当しないのは、「火の勢いを消し」だけである。

(5) ダビデ以外の王で、「他国の陣営を陥れた」(34 節)に該当する王としては、南王国のヨシャパテが思い浮かぶ。

3. 前回までの流れと今後のアウトライン

(1) 前回までに、北王国の歴史を概観し、預言者エリヤとエリシャから信仰の手本を学んだ。二人とも信仰によって「剣の刃をのがれ」た。ヘブル人への手紙の著者は、エリヤについては、11:37 で「羊ややぎの皮を着て歩き回り」とも記し、その苦難の生涯を思い起こしている。

(2) 今回から、南王国の歴史を概観し、バビロン捕囚の時期に至るまでの流れをつかむ。

本日は、王ヨシャパテに焦点をあてる。

- (3) 次回以降は、ヨシャパテのあとの王たちの歴史を概観してバビロン捕囚の時期に入る。34節「獅子の口をふさぎ」に該当する預言者はダニエル、「火の勢いを消し」に該当するのは、ダニエルの3人の同僚たちである。
- (4) 11:32~34は、信仰によって国家的な勝利を得たり、個人的な救出を体験した例である。それに対し、11:35~38は、勝利や救出はなく、苦難を受け取っただけで終わったかのように見える例である。テーマは「信仰は死を乗り越える」。南王国の預言者の中からイザヤ、そして南王国末期、まさにエルサレム陥落の時の預言者エレミヤなどを学ぶ。そして、11:39~40「11章全体の結論」へと続く。

■南王国の特徴と預言者たち

1. 南王国の特徴：王朝の交替はなく、「ダビデの家」、すなわちダビデの王統が続く

- (1) 北王国の特徴は、王朝の交替であった。謀反が繰り返され（私的な謀反だけでなく、主に油注がれての謀反もある）、そのたびに王となる人の部族や家系が変わった。最後は、アッシリヤによって首都サマリヤ陥落。民はアッシリヤに強制移住。
- (2) それに対して南王国の特徴は、ユダ族ダビデの家系から王を立て続けたことである。その途中ではダビデの家系が王位を失う危機もあったが、主がダビデ契約のゆえに守ってくださり、ダビデの家は継続した。主の約束は、人の側に問題があっても、必ず成就する。
- (3) 主はモーセを通して「祝福とのろい」をイスラエル民族の上に置かれた。主の命令に従順に従うなら、祝福を受けて約束の地で繁栄する。しかし、偶像崇拜に陥り主を捨てるなら、のろいを受けて約束の地から吐き出される。南王国もまた、最後は、バビロニアによって首都エルサレム陥落。民はバビロンに強制移住、これがバビロン捕囚である。（義人＝信者は、復活を受けて約束の地を受け継ぐ）

2. 預言者たち

- (1) 王国時代は、背教に走る王と民に対して、主が預言者を何人も遣わして、主に立ち返るよう呼び掛けた時代である。北王国ではその代表的な預言者がエリヤとエリシャであった。南王国では、イザヤとエレミヤである。
- (2) 北王国を圧迫した外国は、アラム（シリア）であった。エリヤとエリシャの記事にアラムとの戦いが多いのはそのためである。
- (3) そのアラムを滅ぼし、北王国を飲み込んだ強国が、アッシリヤである。その首都はニネベ。預言者ヨナはここに遣わされた。アッシリヤの手は南王国にも向かったが、そのとき国を守った預言者がイザヤである。
- (4) アラムとアッシリヤ、いずれもセム系の民族である。イスラエル民族とは同系である。このあと、時代はヤペテ系の民族に覇権が移っていく。ノアに与えられた預言のとおりである（創9:27）。急速に勢力を伸ばし、あっという間にアッシリヤを飲み込んだのが、ヤペテ系のバビロニアである。この国は、イザヤの時代には遠い弱小国と思われていた（Ⅱ列20:12~19）。南王国は、そのバビロニアによって滅亡した。そのときの預言者がエレミヤである。

■南王国の最初の4人の王たち (BC930~846頃)

1. 分裂時、ユダの王は、ソロモンの子レハブアム (41歳、17年間) I列14章
 - (1) 彼の母の名はナアマ、アモン人であった (I列14:21)。
 - (2) ユダの人々は、すべての高い丘の上や青木の下に、「高き所」、「石の柱」、「アシェラ像」を立てた。神殿男娼もいた。主がイスラエル人の前から追ひ払われた異邦の民の、すべての忌みきらうべきならわしをまねて行っていた (I列14:24)。
 - (3) 第5年に、エジプトの王シシャクがエルサレムに攻め上って来て、主の宮の財宝、王宮の財宝を奪い取り、ソロモンが作った金の盾も全部奪い取った (I列14:26)
 - ① II歴12:2~12 預言者シャマヤ、レハブアムとつかさたちのへりくだり
 - (4) II歴12:14 彼は悪事を行った。すなわち、その心を定めて常に主を求めることをしなかった。
2. アビヤム (3年間) I列15:1~8
 - (1) 「彼の母はマアカ、アブシャロムの娘」 (I列15:1) とあるが、II歴13:2では「ミカヤ、ギブアの出のウリエルの娘」。
 - (2) ダビデに免じて、主は、エルサレムにおいて彼に一つのともしびを与え、彼の跡を継ぐ子を起し、エルサレムを堅く立てられた (I列15:4)。
 - (3) II歴13章、北のイスラエル王ヤロブアムとの戦いにおいて、ユダの人々が主により頼んだので勝利を得た。アビヤムは、14人の妻をめとり、22人の息子、16人の娘をもうけた。
3. アサ (41年間) I列15:9~24
 - (1) 彼の母はマアカ、アブシャロムの娘
 - (2) アサは父ダビデのように、主の目にかなうことを行った・・・高き所は取り除かれなかったが、アサの心は一生涯、主と全く一つになっていた (I列15:11~14)。
 - ① 神殿男娼を国から追放した。
 - ② 先祖たちが造った偶像をことごとく取り除いた。
 - ③ 彼の母マアカがアシェラのために憎むべき偶像を造ったので、彼女を王母の位から退けた。その憎むべき像を切り倒し、ギデロン川で焼いた。
 - (3) これらの出来事は、II歴14~15章の記事によると次のようになる。
 - ① 治世第10年まで：異教の祭壇と高き所を取り除く。柱を砕き、アシェラ像を打ち壊す。民に主を求めさせ、その律法と命令を行わせる。ユダに防備の町々を築く。
 - ② 治世第11年から15年：クシュ人ゼラフが100万の軍勢と300台の戦車を率いて攻めてきた。これに対して「私たちはあなたにより頼み、御名によってこの大軍に当たります」と主に叫び求めて戦い、勝利した。
 - ③ 治世第16年から35年：彼の母マアカがアシェラのために憎むべき偶像を造ったので、彼女を王母の位から退けた。その憎むべき像を切り倒し、ギデロン川で焼いた。高き所はイスラエルから取り除かれなかったが、アサの心は一生涯、完全であった (主と全く一つになっていた)。
 - 「イスラエル」とは、アサが攻め取ったエフライムの町々 (II歴17:2)
 - (4) 北イスラエルの王バシャがユダに攻め上って来て、ラマに砦を築いた。アサは、主

の宮の宝物倉と王宮の宝物倉とに残っていた銀と金をアラムの王ベン・ハダデに贈り、北イスラエルとの同盟関係を破棄して逆に北イスラエルを攻撃するよう要請した。これが成功して、北イスラエルはラマから撤退。ラマの建築に用いられていた石材と木材を運びだし、ベニヤミンのゲバとミツパを建てた（I列 15 : 16~22）。

● この時期は、II歴 16 : 1によると、アサの治世第 36 年（あと 5 年間）

(5) 彼は年をとったとき、足の病気にかかった（I列 15 : 23）。

① この原因は、II歴 16 : 7~10。アラムの王を頼んだことは誤りであった。それを伝えた予見者ハナニを足かせにかけ、民のうちのある者を踏みにじった。

② 病気になった時期はそれから 3 年後、II歴 16 : 12。アサの治世第 39 年、両足とも病気にかかり、その病は重かった。ところが、その病の中でさえ、彼は主を求めるときをしないで、逆に医者を求めた。彼はその 2 年後に死んだ。

4. ヨシャパテ（35 歳、25 年間・最初の 2 年間はアサと重なる） I列 22 : 41~50

(1) 母の名はアズバ、シルヒの娘（I列 22 : 42）

(2) 彼はその父アサのすべての道に歩み、その道からそれることなく、主の目にかなることを行った。しかし、高き所は取り除かなくなった。民はなおも、その高き所でいけにえをささげたり、香をたいたりしていた（I列 22 : 43）

(3) イスラエルの王と友好関係を保っていた（I列 22 : 44）

(4) 父アサの時代にまだ残っていた神殿男娼をこの国から除き去った（I列 22 : 45）

(5) タルシシュの船団をつくり、金を得るためにオフィルに行こうとしたが、船団はエツヨン・ゲベルで難破した（I列 22 : 48）。

① イスラエルの王アハズヤが船団を共同で再建しようと提案したが、ヨシャパテは承知しなかった（I列 22 : 48~49）。

② この船団は、当初から北王国イスラエルの王アハズヤとの合同事業であった。船団が難破したのは、主がそうなさったからである（II歴 20 : 35~37）

■四番目の王ヨシャパテについて詳しく見ると・・・

1. I列の記事はわずか 10 節であるが、II歴 17 章~20 章に詳しい記事がある。

2. II歴 17 : 7~9 治世第 3 年に、つかさたちにレビ人や祭司を同行させて、ユダの町々を巡回し、民に律法の教育をした。

3. ヨシャパテは「しだいに並はずれて強大になり、ユダに城塞や倉庫の町々を築いた」（II歴 17 : 12）。ヨシャパテには「富と誉れとが豊かに与えられた」（II歴 18 : 1）

4. 「イスラエルの王との友好関係」（I列 22 : 44）

(1) ヨシャパテは、北の王アハブと縁を結んだ（II歴 18 : 1）。

(2) 具体的には、長男ヨラム（II歴 21 : 3）の妻にアハブの娘を迎えた（II歴 21 : 6）。その娘の名はアタルヤ（II列 8 : 26）、後にダビデの王統に大きな危機を及ぼす。

5. II歴 18 : 2~19 : 1 北のアハブ王のために援軍として出陣して危うい目に遭う

(1) 北のアハブ王は、イスラエルの領地であったラモテ・ギルアデをアラムから奪還するための戦いに、ヨシャパテを誘い込んだ。

① ヨシャパテは「あなたとともに戦いに臨みましょう」と答えて、次に、「まず、

主のことばを伺ってください」とアハブに言ったので、アハブは 400 人の預言者たちを召し集めた。400 人の預言者が全員勝利を預言した。

- ② ヨシャパテは「私たちがみこころを求めることのできる主の預言者がほかにいないのですか」と尋ねると、アハブは「いや、もうひとりいる。しかし、私について悪いことばかりを預言するから、嫌いだ。」と答えた。ヨシャパテが「王よ。そういうふうには言わないでください」と言ったので、アハブは預言者ミカヤを呼んだ。
 - ③ 預言者ミカヤは、「戦いに敗北して、アハブは無事には戻ってこれない」と預言した。アハブは、預言者ミカヤを牢獄に監禁して出陣した。
- (2) 北の王アハブは変装して、自分が王とわからないようにし、南の王ヨシャパテには王服を着ているようにさせて、アラム軍との戦場に臨んだ。
- ① 予想どおり、敵の攻撃はヨシャパテに集中したが、主はヨシャパテを助けた。
 - ② 敵兵がなにげなく弓を放つと、アハブの胸当てと草摺の間を射抜いた。アハブは乗車していた戦車の御者に、「手綱を返して、私を敵陣から抜け出させてくれ。傷を負ってしまった」と言って、後方に退いた。
 - ③ 戦いはますます激しくなった。アハブは、アラム軍に向かって、夕方まで戦車の中に立っていたが、日没のころになって死んだ。
- (3) I 列 22 : 35~38 退却
- ① 日没のころ、陣営の中に、「めいめい自分の町、自分の国へ帰れ」という叫び声が伝わった。北の王が死んだので、指揮官が退却命令を出したのである。
 - ② 王の遺体は北王国の首都サマリヤに帰り、葬られた。戦車はサマリヤの池で洗われた。戦車の中にはアハブの血がたまっていたが、犬がその血をなめた。
 - ③ 「主が語られたことばのとおりであった」これは、I 列 21 : 19 のエリヤの預言を指す。無実のナボテを石打ちにしたイズレエルの町でアハブも血を流して死ぬというさばきの預言であったが、アハブが主の前にへりくだったので保留された。犬がアハブの血をなめるという部分は、その通りになった。
- (4) アハブが戦死してその子アハズヤが北王国の王になったのは、ヨシャパテの治世第 17 年 (I 列 22 : 51)。第 1 年をヨシャパテが単独王となった 37 歳とすると 53 歳のときである。ここまで主の祝福を受け、助けを受けて順調なように見えたヨシャパテであるが、60 歳までのあと 7 年、彼は大きな試練を受ける。
6. 先見者ハナニの子エフーがヨシャパテの前に出向いてきて、「あなたは主を憎む者たちを愛してよいのか。これによって、あなたの上に、主の前から怒りが下る」と預言する (II 歴 19 : 2~3)。ハナニは、ヨシャパテの父アサが足かせをかけた預言者である。
7. II 列 1 : 1 には「アハブの死後、モアブがイスラエル (北王国) にそむいた」とある。
- (1) II 列 1 : 2 で「さて」と話題が転換され、挿入話が 3 : 3 まで続く。
 - (2) II 列 1 : 1 のモアブの離反については、II 列 3 : 4 につながる。「モアブの王メシャは、・・・アハブが死ぬと、モアブの王はイスラエル (北王国) の王にそむいた」。
 - (3) アハブの死後、王となったのはアハズヤである。アハズヤ王は、屋上の欄干から落ちて病気になる、その治世はわずか 2 年であった (I 列 22 : 51~53、II 列 1 : 2~17)。モアブ問題の対処は、次の王、アハズヤの兄弟ヨラムに持ち越されることに

なるが、北王国が動かないと見て、モアブは南王国に迫る。これは、エフーの預言のとおり、主の怒りがヨシャパテに下ったのである。

8. モアブが南王国ユダに迫る (Ⅱ歴 20:1~22)
 - (1) モアブ人、アモン人、セイル山の人々 (エドム人) が連合して、攻めて来た。
 - (2) 彼とユダの人々は、主の宮の庭で、主の助けを求めた。アブラハム契約と荒野の旅における主の命令を基礎として祈り求めた。
 - (3) そして、「私たちに立ち向かって来たこのおびただしい大軍に当たる力は、私たちにはありません。私たちとしては、どうすればよいかわかりません。ただ、あなたに私たちの目を注ぐのみです」と、主に抛り頼んだ。
 - (4) 預言者ヤハジエルのことば「この戦いではあなたがたが戦うのではない。しっかり立って動かずにいよ。あなたがたとともにいる主の救いを見よ。ユダおよびエルサレムよ。恐れてはならない。気落ちしてはならない。あす、彼らに向かって出陣せよ。主はあなたがたとともにいる」
 - (5) 賛美歌隊が武装した者の前に行き出て、喜びの声、賛美の声をあげ始めると、主は伏兵を設けて、ユダに攻めて来た人々を襲わせたので、彼らは打ち負かされた。
 - (6) 具体的には、この戦いの展開は、次のようであった。(Ⅱ歴 20:22~24)
 - ① 「主が設けた伏兵」とは、天使たちである。
 - ② 天使たちは、「ユダに攻めて来たアモン人、モアブ人、セイル山の人々 (エドム人)」をかく乱した (同士打ちの例は、士師記 7:22。かく乱した例は、Iサム 7:10。兵士たちの目が見えなくなった例は、Ⅱ列 6:18)
 - ③ これにより、アモン人とモアブ人は、セイル山の人々に立ち向かった。その結果、セイル山の人々が全滅した。
 - ④ 今度は、アモン人とモアブ人が互いに戦い、滅ぼし合った。その結果、死体が野にころがり、のがれた者はひとりもなかった。
9. Ⅱ歴 20:35~37 その後、ヨシャパテは、イスラエルの王アハズヤと同盟を結んだ。
 - (1) その目的は、「タルシシュ (スペイン) 行きの船団」をつくるため。地中海を行き来して交易をするために、大型の船を何隻か建造した。ソロモン王の時の繁栄を再びという願いがあったのかもしれない (Ⅰ列 9:26~28、10:22)
 - (2) 海運・船の建造といえば、ツロカ、シドン。アハブの妻、アハズヤの母イゼベルは、シドンの王の娘である (Ⅰ列 16:31)。
 - (3) 交易の主な目的は、金を得るため (Ⅰ列 22:48)
 - (4) 預言者エリエゼルにより「主はあなたの造ったものを打ちこわされた」と告げられるとその直後に、船は難破した。
10. Ⅱ列 3:6~27 北王国イスラエルの王がアハズヤからヨラムに代わって、北王国がやっとモアブ問題に本腰を入れることとなった。ヨラム王は、モアブ制圧のため、南王国ユダの王ヨシャパテとエドムの王に援軍を要請した。3人の王とその連合軍は、行軍中に荒野で七日間も回り道をしてしまい、携行していた水が尽きて危機に陥る。このとき、預言者エリシャが「ユダの王ヨシャパテのために」と言って、「風も見ず、大雨も見ないのに、この谷には水があふれる」と預言すると、その通りとなって連合軍は助かり、モアブとの戦いにも勝利した (Ⅱ列 3:6~27)。

■アサとヨシャパテに見る信仰とは

1. 「アサの心は一生涯、主と全く一つになっていた」
 - (1) 類例 創6:8「ノアは主の心にならなっていた。・・・ノアは、正しい人で、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ」。
 - (2) ノアもまた罪人であり、その行いにおいては失敗もした(創9:21)
 - (3) 「正しい人」とは、恵みにより信仰を通して義人と認められた人である。
 - (4) アサもまた、そのように信者として、「主と全く一つになっていた」。
 - (5) 信者であるアサが、予見者ハナニを足かせにかけ、民のうちのある者を踏みにじった。主は信者が罪を犯しその罪を悔いず主に赦しを求めないなら、その者を病気にすることがある。アサの場合、3年後に両足が病気となり、その病は重かった。ここで主を求めれば、彼は病気から救われたであろう。ところが、その病の中でさえ、彼は主を求めることをしないで、逆に医者求めた。彼はその2年後に死んだ。
 - (6) 彼は肉体的なさばきは受けたが、信者としてすでに受けていた霊的な救いは失っていない。彼は、終わりの日に義人としてよみがえらされるであろう。救いは主の恵みによるのであって、その人の行いによるのではない。この原則は、旧約の時代も、新約の時代も不変である。
2. ヨシャパテについては、「彼はその父アサのすべての道に歩み、その道からそれることなく、主の目にかなうことを行つた」とはあるが、「心が、一生涯、主と全く一つになっていた」とは記されていない。
3. II歴17:3~10を見ると、彼は主を一生懸命に求めた。そして「主はヨシャパテとともにおられた」。
4. ヨシャパテは、主から祝福をいただき、軍事的にも経済的にも強大になった。しかし、豊かになったとき、まわりの誰からも認められて賞賛を受けるようになったとき、こういうときが危うい。ヨシャパテは政略結婚により、アハブの娘アタルヤを長男ヨラムの嫁に迎えてしまった。アタルヤは後年、ダビデの王統に大きな危険を及ぼす人物となる。
5. ヨシャパテは、北のアハブ王と同盟したことで預言者エフーから主から怒りを受けるとの警告を受け、実際にモアブ・アモン・エドム連合軍の大規模な攻撃を受けた。
 - (1) 警告から攻撃を受けるまでの間も、彼は主を一生懸命に求めた(II歴19:4~11)。
 - (2) 警告の中でも「あなたは、心を定めて常に神を求めて来られました」(II歴19:3)と言われた通りである。
6. しかし、ヨシャパテは、攻撃を受けた後もなお、北王国との友好関係を改めず、危機を招いた。
 - (1) 北王国の次の王、アハズヤ王とは、金を求めて船団を共同運航しようとしたが、船は難破。船団の再建は断念して、このときは深追いしなかった。
 - (2) アハズヤの次の王、ヨラム王の要請を受けて、対モアブ戦に参戦。荒野で飲料水を失い、自滅しかけたところを、預言者エリシャを通して主に救われた。
7. 以上のように、ヨシャパテは、晩年の7年間に主の懲らしめ、訓練を受け続けた。人は富を得、何かに成功したときほど、主の前にへりくだることが大切である。人生に起きるいろいろな問題に対して、人は無力である。ヨシャパテの祈り「力は、私たちにはありません。私たちとしては、どうすればよいかわかりません。ただ、あなたに私たちの

目を注ぐのみです」とは、まさに信者の祈りである。

8. ヨシャパテが「信仰によって他国の陣営を陥れた」ときの、試練の中での勇気とは（Ⅱ歴 20:6~22）、
 - (1) 神の約束を握ること、そして「自分は無力である。ただあなたに目に注ぐのみ」、しかし「主は私を救ってください」と主に信頼することが、ベースである。
 - (2) ヨシャパテはこの戦いでは、「恐れず、気落ちせずに、出陣せよ。しかし、自分では戦わずに、しっかり立って動かずにいよ」と命じられた。主のことばに従う勇気である。
 - (3) このときの手本は、試練の中で「喜びの声、賛美の声」をあげたことである。
9. とは言え、このような信仰を発揮したかと思うと、その後には、また過ちを繰り返すヨシャパテであった。しかし、それが人である。罪の性質に縛られている人の現実であり、限界である。そこに主の真実が輝く。主の約束は人の側の問題によって撤回されることはない。主はヨシャパテを守り通してくださった。救いは人の行いによらず、主の恵みによる。信者がどんなに過ちを犯し、誤りを繰り返したとしても、主は信者を見捨てず、必ず守ってくださる。このことを知ることが、試練の中で人が勇気を保つことのできる、ゆるがない土台である。